

嘘

新美南吉

青空文庫

久助きゆうすけ

君はおたふくかぜにかかつて、五日間学校を休んだ。

六日めの朝、みんなに顔を見られるのははずかしいなと思いな
がら、学校にいくと、もう授業がはじまっていた。

教室では、案のじよう、みんながさあつとふりむいて久助君の
方を見たので、久助君はあがってしまつて、先生のところへ欠席
届を出し、じぶんの席へ帰るまでに、つくえのわきにかけてある
友だちのぼうしを、三つばかりはらい落としました。さて、
じぶんの席について読とくほん本をひらいた。

となりの加市君が、いま習っているのは十課だということをしてさして教えてくれた。もう十課まで進んだのか。久助君は、八課の「雨の養老」を習っていたとき、なんとなく左のほおが重いのに気がつき、その日から休んだのだった。

じぶんが休んで家でねていたときに、みんなは八課ののこりと九課を習ったんだなと思うと、久助君は、今ここにみんなといっしよに読本をひらいて、先生のお話を聞いていながら、みんなの気持ちとなじめないものを感じた。

そのとき、先生から指でさされて、前のほうのだれかが読本の朗読をはじめた。

「第十、稲むらの火。これは、ただごとでない、つぶやきなが

ら、五兵衛ごへえは家からきた……」

おや、へんだなど、久助君は思った。聞きなれない声だ。あんな声で読むのは、いったいだれだろう。そこで久助君は、本から顔をあげてみると、南のまどのそばの席で、ひとりの色の白い、セル地の美しい洋服をきた少年が、久助君の方に横顔を見せて朗読していた。久助君の知らない少年だ。

久助君はその少年の横顔を見ているうちに、きみのような錯覚さつかくにとらわれはじめた。じぶんは、まちがってよその学校へきてしまったのではないかと、思ったのである。いや、たしかに、これは久助君の通っていた岩滑やなべの学校の五年の教室ではない。いま読んでいる少年を、久助君は知らないのだ。そういえば先生も、な

るほど久助君の受け持ちだった山口先生にてはいるが、別人であるらしい。友だちのひとりひとりも、久助君のよく知っている岩滑の友だちとどこかにてはいるが、どうも知らない学校の知らない生徒たちだ。五日間休んで、じぶんの学校を忘れてしまい、よその学校へはいつてきたのだ。これはとんでもないことをしてのけた。久助君は、そんなふう^{ふう}に思ったのだ。そしてすぐつぎのせつなに、やはりこれは久助君のもとの学校であるというところがわかって、久助君はほつとした。

休けい時間がきたとき久助君は、森医院の徳とくいち一君いちにきいた。

「あれ、だれでエ」

南のまどぎわの色の白い少年は、まだ友だちができないのか、

ひとりで鉛筆をけずっていた。

「あれかア」

と、徳一君はこたえていった。「あれは、太郎左衛門たろうざえもんて名だよ。
横浜からきたアだけな」

「太郎左衛門？」

久助君はわらいだした。「年よりみたいだな」

徳一君の話によると、その転入生のほんとうの名は太郎左衛門
というんだが、それではあまり年よりじみていて、太郎左衛門が
かわいそうだから、子どものうちは太郎と家でもよんでいるので、
子どもなかもでもそうよぶようにさせてくれと、一昨日、太郎左
衛門をつれてはじめて学校へきたおかあさんが、先生にたのんで

いったのだそうである。それを聞いて久助君は、なるほど、おとなはうまいことを考えるものだなと思つた。

こんなぐあいに太郎左衛門は、久助君の世界にはいつてきた。

二

岩滑やなべの学校はいなかの学校だから、なんといつても、都会ふうの少年はみんなの目をひくのである。久助君も最初から、なんとなく太郎左衛門に心をひかれたのだが、よい機会がないので近づけなかつた。徳一君にしても、加市君にしても、音次郎君にしても——できのよい連中はみな、久助君と同じような気持ちなのだ。

それが、おたがいにあまりよくわかつているので、だれも手を出そうとしないのであった。で、久助君は、課業中にいつのまにか、太郎左衛門をじつとながめているじぶんに気づくことがあった。

太郎左衛門は、久助君より前の方の、南のまどぎわにいたので、久助君のところからはちようど、右の大きい目玉と、美しく光るかみの毛でとりまかれた、形のよいつむじが見えた。太郎左衛門は、その大きい目で、教科書の字を長いあいだ見ていては、おもむろに先生の方へ視線をむけて、話に聞き入っていた。どうかすると、課業にうんで、かすかなといきをもらしながら、すこししせいをくずすが、またすぐ、熱心に先生の方をながめるのであった。それだけのことで、久助君には、太郎左衛門が、じぶんたち

のように道のほこりや草の中でぞだつてきたものではないことがわかり、太郎左衛門をすきにもなれば、なにかもの悲しい思いでもあつたのである。

あるとき久助君は、いつものようにじぶんの席から、その美しい少年をながめていた。それは、ひとりの美しい少年であつた。この美しい少年は、いったいなんという名だろうと、久助君は思った。そしてすぐ、なアんだ、太郎左衛門じゃないかと、口の中でいった。

ふいと久助君は、まえに、えがわたろうざえもん江川太郎左衛門というえらい人物の伝記を、ある雑誌で読んだことを思い出した。よくはおぼえていないが、江戸時代の砲術家ほうじゆつかで、伊豆いずの蕪山にらやまに反射炉はんしゃろという

ものをきずいて、そこで、そのころとしてはめずらしい大砲を鑄ちゆうぞう

造ぞうしたという人である。そして、れんがを積みあげてつくつたらしい反射炉の図と、びっくりした人のように目玉の大きい、ちよんまげすがたの江川太郎左衛門の肖しょうぞう像ぞうが、久助君の頭にかんだ。

この少年太郎左衛門は、あの江戸時代の砲術家の太郎左衛門と同じ名なのである。同じ名ならば、ふたりは同じ人間ではあるまいか。

しかし、そんなはずはない。第一、江戸時代におとなだった太郎左衛門が、現在、子どもになっているというわけがないのである。それでは、事の順序がぎやくというものだ。

久助君は、じぶんのばかげた考えをうちけした。にもかかわらず、久助君には、砲術家太郎左衛門と、この少年太郎左衛門が同一人物のように思えたのである。江戸時代におとなだつた人間が、だんだんわかくなつて、いまは少年になつてゐるのだ——さまざまな人間のなかには、そういうような特別な生きかたをするのが、ひとりやふたりは、いるかもしれない。目がぎよろりと大きいところは、この太郎左衛門もあの太郎左衛門もいっしょじゃないか。久助君は、そんなことをくちに出していえば、ひとがいっしょう笑にふしてしまうことは知っていたので、ただじぶんひとりで空想にふけるだけであつた。

その日、学校から帰るとき、久助君は、太郎左衛門の三メートル

ルばかりうしろを歩いていった。むろん久助君は、太郎左衛門のあとをつけていくつもりはないのだが、ぐうぜん、ふたりの帰る方向と歩く速度が同じであつたため、こういう結果になつてしまつたのであると、ひとり弁解しながらついていった。

あき地のそばを通つているとき、太郎左衛門は、ふいに久助君の方をふり返つて、

「きみ、あの花、なんだか知つている？」

と、すこししやがれた声で、りゆうちよう流暢にきいた。そつちを見ると、いぜんここに家があつたじぶん、花畑になつていたらしい一角に、小さな赤黒いさびしげな花が、二、三本あつた。

久助君は知らなかつたのでだまつていると、

「サルビヤだよ」

といつて、美しい少年の太郎左衛門は歩きだした。むこうが話しかけたんだから、こつちも話していいのだと思つて、久助君は、すこし胸をおどらせながら、

「横浜からきたのン？」

ときいた。横浜からきたことは、もう徳一君から聞いて知つていたから、いまさらきく必要はないのだが、ほかにはなにもいうことがなかつたのである。ところで久助君は、きいてしまつてから、ひやあせが出るほどはずかしい思いをした。というのは、「きたのン？」などということばは、岩滑やなべのことばではなかつたからだ。岩滑のことばでできくなら、「きたのけ？」あるいは、「きたアだ

け？」というところである。しかし久助君には、日ごろじぶんたちが使いなれている、こうしたことばは、この上品な少年にむかつて用いるには、あまりげびているように思えた。といって久助君は、岩滑以外のことばを知っているわけでもなかった。そこで、どこのことばともつかない「きたのン？」などという中途はんぱのことばが出てしまったのである。もし徳一君や、加市君や、兵太郎君など、日ごろのなかまがいまのことばを聞いていたなら、あとで久助君は、背中をたたかれたりしながら、どんなにひやかされるかしのれないのだが、ありがたいことに、それを聞いたのは、太郎左衛門だけである。太郎左衛門はまだ、岩滑のことをよく知らないから、こんなことばも岩滑にはあるだろうぐらいに思っ

気にとめなかつたのであろう。

「ああ」

と、かれはこたえた。それからまた、赤い花の方を見ながら、

「ぼくのいさん、あれがすきだったのさ。画家なんだよ」

画家というのは絵をかく人であることぐらいは見当がつくが、じっさいの画家を見たことのない久助君には、こんな話に、なんと返事していいかわからないのである。

「おととしの秋ね、ベロナールで自殺しちやつたの」

自殺というのはじぶんで死ぬことだというくらいは、久助君にだつてわかるが、そんなことばを使うものは、久助君のいままでのなかまには、ひとりもいなかつたので、ただもう、めんくらう

ばかりである。

じぶんの家の門の方へまがりかけた太郎左衛門は、なにか思いついたように久助君のところへもどつてきて、

「きみ、いいもんあげよう、手を出したまえ」

といった。久助君がもじもじしながら手を出すと、太郎左衛門は、小さい万年筆みたいなものをその上でふった。すると小さいみじん玉がひとつぶ、久助君のてのひらの上にこぼれ出た。太郎左衛門はじぶんのてのひらにもふり出すと、それを口の中へほうりこんで、門の方へいつてしまった。久助君は、はじめ、くうきじゆう空気銃で使うみじん玉かと思つたが、みじん玉にしては、てのひらにころよい感じをあたえるあの重みがないので、別のものだと考えた。

そして、ともかく太郎左衛門のまねをして、口の中に入れてみた。

舌の先でしばらくまわしていると、にがいまずいしるがとけて出たので、なんだ、こんなもん、かぜのとき飲まされるトンブクの玉みたいじゃないかと思つて、はき出そうとした。するととんに、そのにがかったものが、すずしいあまさに変わつて、じつに口の中が爽快そうかいになつたので、久助君はひとりで、クツクツとわらいだしてしまつた。なんだ、こんなもんか。ハツカのもとと、いうようなものなんだな。しかし、すぐにまた、舌の先がにがみをおぼえはじめ、久助君は顔をしかめずにはおれなかつた。しかし、いまにまた、すずしくあまくなるだろうと思つて、がまんしていた。はたして、まもなくそのとおりになつた。これで久助君

には、この玉のしかけがわかった。にがくなったり、あまくなったり、交互こうごにくり返すようになっていなのだ。ところで、三どめににがくなってきたとき、久助君はもういやになって、はき出してしまった。それはとけて、茶色のつばになっていた。はき出したあとで口をあけて空気をすいこむと、これはまた、なんとという爽そうかい快なことだろう！ 久助君の小さな口の中に、すずしい秋の朝が、ごっさりひとつはいいりこんだみたいだ。久助君はその爽そうかい快味いみを満喫まんきつするため、大きく口をあけて、ハアーツハアーツと呼吸しながら、家までできてしまったのである。

「なんだい、久は。仁丹じんたんのにおいをさせてるじゃないか」と、おかあさんがいった。そこではじめて久助君は、なぞがとけ

て、そして、ばからしくなってしまうた。仁丹なら、久助君は百も知っていたのだ。もつとも、たべたことは、こんどがはじめてだけれど。

どうしてまた久助君は、ありふれた仁丹なんかを、なにかたいへんな、ふしぎなもののように思いこまされてしまったんだろう。思えば思うほど、久助君にとって、太郎左衛門はきみような少年であった。

三

道から十メートルばかりはいったところに、太郎左衛門の屋敷やしき

の門がある。光蓮寺こうれんじの山門をすこし小さくしたような、さびた金具などのついた古めかしい門である。横に小さいくぐりがあつて、太郎左衛門はそれから出はいりし、門はいつでもしまつてい

る。
太郎左衛門といっしよにそこまできて、太郎左衛門が、「しつ
けい」とか、「さよなら、またあした」などといつて、そのくぐ
りからすつと中へはいり、あとにぴったりくぐり戸もしめられて
しまうと、久助君は、いったいこの門の中で、太郎左衛門はどん
なことをしているのだろう、おとなのことばでいえば、どんな生
活をしているのだろうと、ちよつと思つのであつた。しかし、あ
まりその中にはいつてみたいとは思わなかつた。

なにしろ、ばかにしんかんとしているのである。古めかしくてしんかんとしている——、そういうところを、久助君はこのまなのいだ。

あるとき久助君は、太郎左衛門についてその門の中にはいった。庭はあんがいせまかった。だが、久助君の目をひきつけたものがそこにあつた。まっ四角な深い池で、底の方に緑色のごつた水がよどんでいた。四方の石がきにはこけがいつぱいについて、石の色はすこしも見えない。つまり、この一升ますのような形の池は、なにからなにまで緑色である。そして水の中には、こいがいるらしい。ところどころ、水の緑色の中に、ぼんやりした赤や、白がみとめられるのは、たしかにそれだ。久助君はしばらくのぞ

いていると、なまぐさいいやなおいが鼻につきはじめた。そればかりか、この池全体が、なにか、子どもによそよそしい感じをもっていることがわかったので、じきそばをはなれてしまった。

久助君は、招かれてふじの花のさいている縁側えんがわの方へいった。縁側とざしきはあかり障子しょうじでへだてられていたが、太郎左衛門が中から出てきたとき、あけっぱなししておいたところから、久助君は中をのぞくことができた。

久助君はそこに、ひとりの黄色いしごきをした少女を見た。きつと、太郎左衛門のねえさんであろう。顔色が茶わんのように白くて、やせていた。彼女は、座敷のもうひとつおくの暗いへやから、金魚ばちほどのほやのついたランプをかた手で持ち、もう一

方の手でふすまをなでながらあらわれ、座敷のすみにおいてあるつくえをさぐりあてると、その上にランプをすえた。目を大きく見ひらいているのに、手さぐりでそんなことをしていると、みると、あきめくらなのだろう。なんにしても異様な光景である。久助君は、いきをのんで見つめていた。

つぎに少女は、マツチをすつてランプに火を入れた。そしてつくえの前にすわると、だれもないのに、つくえのむこう側にだれかいでもするようになつた。

「おとうさんが、はじめての航海でフランスのマルセイユにいったとき、その港のうら町の小さな道具屋で見つけたランプなんです。なんでも、ルイ十六世のものらしいって

らしたわ」

と、しゃべった。久助君はぶきみになって、身じろぎもできなかつた。この少女は、あきめくらであるばかりでなく、気がくるつていいるのだろう。

太郎左衛門がわらいながら、「ねえさんのばかタン」と前おきして、わけを話してくれたので、なんだ、そうだったのかと、久助君は思った。太郎左衛門のねえさんは、女学校でする学芸会の練習をしていたのである。なんでもそれは、あらしの夜、ふたりの姉きょうだい妹が勉強をしていると、ふいに停電してしまうので、古いランプを持ち出してきてもすのださうである。そうすると、死んだ弟やら、いぜんなくした手まりやら、雨の晩にいなくなつ

てしまった飼い犬やらが、またふたりの姉妹のところにもどつてくるといふ、なにがなにやらわけのわからない、ばかばかしい劇らしい。

久助君は、そこにいる白い少女が、あきめくらでも気ちがいでもないことがわかったけれど、でもなんとなくきみがわるくて、しぜんに、目や耳は少女の方にひきつけられた。

彼女は、つくえのむこうの、すがたも見えなければ返事もしない人に、話をしつづけていた。

「アキ坊ぼうちゃんはね、死んじやったの。もう五、六年もまえの雪のふった晩に」

相手の人がなにかこたえているらしい。それが久助君にはきこ

えないが、彼女にはきこえるとみえて、耳をたてて聞いている。そしてまたいう。

「この子、死ぬってこと知らないんだわ。死ぬってね、かくれんぼうでどつかへかくれて、いつまで待っても出てこないようなもんよ」

すがたの見えない相手がなにかいうらしい。すると彼女は、なにかおかしい返事を聞いたのだろう、とつぜんクツクツクツとわらいだした。そしてこのわらうのが、じぶんで満足のいくようにできないとみえて、彼女はなんどもやりなおした。「クツクツクツ」とか、「ウフツフツフツ」とかいつて。

久助君はもうがまんがでしなかつた。すぐ家へ帰ってしまった。

それからしばらく、久助君は、太郎左衛門の屋敷の門の前を通るときにはきつと、ふじの花のさいている明るい昼間だというのに、ランプをつけて学芸会の劇を練習している、色の白いぶきみな少女のことを思い出したのである。

四

だんだん太郎左衛門は、みんなと親しくなった。みんなは最初のうち、太郎左衛門を尊敬して、すこしいにくかったけれど、「太郎君」とよんでいた。

やがて太郎左衛門は、みんなといっそう親しくなって、みんな

にとりかこまれ、よつぱらいのように下品にしゃべりちらしていることもあつた。するとみんなは、太郎左衛門を尊敬したりするのはふさわしくないことがわかり、えんりよなく、「太郎左衛門」とよぶようになった。

そのうちにみんなはもう、「太郎君」とも、「太郎左衛門」ともいわなくなつてしまつた。というのは、太郎左衛門は、つきあつてもいっつこうおもしろくない、つまらないやつだということが、みんなにわかつてしまつたからである。

はじめから今にいたるまで、「太郎君」というれいぎ正しいよびかたをつづけている人が、ただひとりあつた。それは、受け持ちの山口先生である。

太郎左衛門がうそをつくといううわさがたちはじめたのは、そのころであつた。

「あんなやつのこととは、なんにも信用できん」

というものもあつた。久助君は、そんなこともあるまいと思つた。しかし、あるいはそんなのかもしれないと思つた。

ある日、兵太郎君が五、六人のなかまにむかつて、なにか一生けんめいにふんがいていた。久助君がなんだろうと思つてききにいくと、こうだつた。

兵太郎君が、太郎左衛門に一ぱいくわされたというのである。

午^{うま}ガ池の南の山の中に、深くえぐられた谷間がある。両側のけが、ちようど、びようぶを二まいむかいあわせて立てたようにな

っている。太郎左衛門は、そういうところならとてもおもしろいことができる、兵太郎君にいったのだそうである。つまり、かた一方のがけの上からむこうのがけにむかつて、「おーい」とひと声よびかけると、それがこだまになってこちらへ帰ってくる。そして、こちらのがけにぶつかるや、またこだまになって、むこうのがけに帰っていく。むこうにぶつかつて、また帰ってくる。こちらにぶつかつてまたむこうへいく。そうして、いつまでもそのひとつの「おーい」は、消えないのだという。ある科学の雑誌に書いてあったからほんとうだと、太郎左衛門はあかしまでたてたのだそうだ。それならほんとうだろうと思つて、兵太郎君は、きのう午^{うま}ガ池へつりにいったついでに、例のところまでいって、

ためしてみたのである。そして、太郎左衛門のことばが「うツそ」であることがわかったというのであった。

これじゃたしかに、太郎左衛門はうそつきであると、久助君は思った。するとどうしたわけか、学芸会のけいこをしていた太郎左衛門のねえさんを思い出した。だれも相手がいないのに、じつさいにいるようにじょうずにしゃべっていた、あの白い少女のこ

とを。
またあるとき、こんなことがあったそうである。雨をともなつたはげしいかみなりが、頭の上をすぎていったあと、太郎左衛門が新一郎君に、

「いま、雲の中からひばりが一わ、かみなりにうたれてむこうに

落ちたから、見にいこう。きつと、牛市場のあたりに落ちている」と、声をはずませていった。新一郎君は、まさかうそとは思わなかつたので、ついていって、まだぬれている牛市場の草をふみわけふみわけ、すみからすみまでさがしたが、牛のふんしか落ちてなかつたそうである。これも、太郎左衛門のうそであつたわけだ。

五

太郎左衛門が学校へ、どびんのふたぐらいの大ききの、まるいへんなものを持ってきて、

「これね、とつてもおもしろいんだよ」

といった。

みんなは、太郎左衛門がうそつきであることは承知していたが、いつでもそれを警戒しているわけにはいかなかった。ことに、こんなぐあいには、めずらしいものを持つてきたときには、つい、好奇心のため、ゆだんしてしまうのである。

太郎左衛門の説明によれば、そのまるいものはゾウゲでできていて、シナ人が横浜で売っていたのだそうである。そいつを、耳にうまいぐあいにあてていると、音楽がきけるしかけになっているというのである。

まず、森医院の徳一君からはじめて、みんなは、それを順番に耳にあてがってきいた。みんなが、ちようしんき聴診器を耳にしている医者

のように、しんちようなおもちできいていると、太郎左衛門は、「ね、きこえるだろう。マンドリンみたいな音が。あれ、シナの琴ことなんだって」

といった。すると、「う、うん」と、なま返事するものもあつた。「うん、ちいせい音だなあ」といって、につこりするものもあつた。「きこえやしんげや」といって、二、三どふつて、またあてがつてみるものもあつた。

「また、太郎左衛門のうそだア」

と、太郎左衛門がいるのにそういつたものがあつた。それは兵太郎君であつた。しかしこの場合、みんなはむしろ兵太郎君を信じなかつた。というのは、兵太郎君は、十日ほどまえから、かたほ

うの耳が耳だれで、いやなおいにする緑色のうみをだらりとた
らしていたので、みんなが、例の音楽の道具をかそうとしなかつ
たため、くやしがつっていたからである。

久助君の番がきた。うけとつてみると、黄色なつるつるの美し
いゾウゲである。どびんのふたのように、一方がくぼんでいる。
そして、くぼんだところのまん中に、小さいへそみたいなものが
とび出ている。そのへそを、うまく耳のあなにはめこんできくの
だそうである。

「うーう」と、モートルのうなっているみたいなき音が、はじめき
こえた。その「うーう」のなかに、マンドリンの音がまじってや
しないかと、一心ふらんにきいていると、なるほどかすかに、ピ

ンピンペンペンというような音がきこえるような気がする。

「うん、きこえるきこえる」

と久助君はいつて、つぎのものにわたしたのであつた。

それからまもなく、あしたは春の遠足という日に、久助君はじしやくをさがすため、茶だんすの引き出しをみなひっぱり出して、いろんなガラクタのなかをかきまわしていた。すると、なかから、太郎左衛門が持っていたのと同じゾウゲのまるい道具が出てきた。「うちにも、これがあつたんだなア」

といつて、おとうさんにきいてみると、それは、いぜんたばこをのむ人が持っていた、火ざらというものだそうである。そのさらの上に、まだ火のついているすいがらをのせておき、つぎのたば

ここにすいつけるための道具なのだそうである。

「それでも、ここにこんなへそみたいなものがあるのは、どういうわけだん？」

と、久助君は、あまりのばかばかしさに、すこしはらをたてていった。そのへそには小さいあながあつて、そこにひもを通したにすぎないと、おとうさんは教えてくれたので、もう久助君は、なにもいうことがなかった。まんまと、太郎左衛門に一ぱいくわされたのである。

それにしても、なぜ太郎左衛門は、あんなうそをつくのだろう。なんとというわけのわからぬやつだろう。

よく日、久助君は、教室のまどにもたれてぼんやりしているう

そつきの太郎左衛門の顔を、かれに気づかれぬよう、こちらの人がかけから、まじまじとながめていた。そして、さらにきみようなことを発見したのである。

それは、太郎左衛門の目は、左右、大きさがちがうということである。右の目は大きい。左は小さい。そして、そのうえおかしいことに、大きい目は、美しい、なごやかな、てんしんらんまんな心をのぞかせているのに、小さい目は、いんけんで、ひねくれていて、狡猾こうかつなまたたきをするのである。

こいつはへんだと、久助君が一生けんめい見ていると、さらに、耳も左右大きさと形がちがひ、鼻でさえも、左の小鼻と右の小鼻はちがっているのです、すこしゆがんで見えることがわかった。

久助君は考えた。——太郎左衛門は、ひとりの人間じゃなくて、ふたりの人間が半分ずつよりあつてできているのじゃあるまいか。いぜん、久助君は、ねんどで人形を製造するのを見たことがある。まず、ふたつの型によつて、人形は、半分ずつつくられ、それからふたつの半分がうまく合わさつて、ひとつの人形になるのである。神さまがわれわれ人間をつくり出すのも、あれと同じ方法でするのだろう。そして、太郎左衛門はなにかのまちがいで、大ききのちがう、うまく合わない半分ずつが合わさつてできたのかもしれない。だから、太郎左衛門の中には、ふたりの人間がはいっているのだ。

——それなら、太郎左衛門が平氣でうそをいったり、なにを考

えてるのかわけがわからなかつたりするのは、当然のことだと、久助君は思った。

六

ついに、みんなが太郎左衛門のうそのため、ひどいめにあわされるときがきた。それは、五月のすえのよく晴れた日曜日の午後のことであつた。

なにしろ場合がわるかつた。みんなが——というのは、徳一君、加市君、兵太郎君、久助君の四人だが——たいくつでこまつていたときなのだ。

麦畑は黄色になりかけ、遠くからかえるの聲が、村の中まで流れていた。道は紙のように白く光を反射し、人はめつたに通らなかつた。

みんなは、この世があまり平凡なのにうんざりしていた。どうしてここには、小説のなかのように出来事がおこらないのだろう。

久助君たちは、なにか冒険こういみたいなのがしたいのであつた。あるいは、英雄のような行為こういをして、人びとに強烈な感動をあたえたいのであつた。

そう思っているところへ、その道角みちかどから、太郎左衛門がひよつこりとすがたをあらわしたのである。そしてかれは、まっすぐみんなのところへくると、目をかがやかせていった。

「みんな知ってる？　こんど、大きなくじらが、新舞子しんまいこで見世物になつているとき。なんでも、十メートルほどもあるんだつて」
なにかできごとがあればいいと思つていたやさきだから、みんなは、太郎左衛門のことばだったけれど、すぐ信じてしまった。そしてまた、これはまんざらうそでもなさそうだった。なぜなら、新舞子の海岸には、そのくじらがいないとしても、よく見世物が出てきていることは、夏、海水浴にいったものなら、だれでも知っている。

見にいこうということに、一ぺんで話がきまった。新舞子といえば、知多半島のあちら側の海岸なので、峠とうげをひとつ越していく道はかなり遠い。十二、三キロはあるだろう。しかし、みんなの

からだの中には、力がうずうずしていた。道は、遠ければ遠いほどよかつたのだ。

太郎左衛門も加えて一行は、すぐその場から出発した。家へそのことをいってこようなどと思うものは、ひとりもなかつた。なにしろ、からだはつばめのようにかかるかつた。つばめのように飛んでいって、つばめのように飛んで帰れると思つていたのである。

とんだり、かけたり、あるいは、「帰りがくたびれるぞ」などと、かしこそうにおたがいを制しあつて、しばらくは、せいじようほ正常歩で歩いたりして、進んでいった。

野には、あざやかな緑の上に、白い野ばらの花がさいていた。そこを通ると、みつばちの羽音はおとがしていた。白っぽい松の芽が、

におうばかりそろいのびているのも、見ていった。

半田池をすぎ、長い峠道をのぼりつくしたところから、みんなは、沈黙がちになってきた。そして、もしだれかがしゃべっていると、それがうるさくて、はらだたしくなるのであった。知らないうちに、みんなのからだに、つかれがひそみこんだのだ。

だんだん、みんなは、つかれのため頭のはたらきがにぶってきた。そして、あたりの光が弱ったような気がした。じつさい、日もだいぶん西にかたむいていたのだが、それでも、もうひきかえそうというものは、だれもなかった。まるで命令をうけているもののように、先へ進んでいった。

そして大野の町をすぎ、めざす新舞子しんまいこの海岸についたのは、

まさに、太陽が西の海にぼっししようとしている日ぐれであった。

五人はくたびれて、みにくくなつて、海岸に足をなげ出した。そして、ぼんやり海の方を見ていた。

くじらはいなかった。また、太郎左衛門のうそだった！

しかしみんなは、もう、うそであろうがうそでなからうが、そんなことは問題ではなかった。たとい、くじらがそこにいたとしても、みんなはもう、見ようとしなかつたろう。

つかれのために、にぶってしまったみんなの頭のなかに、ただひとつ、こういう思いがあつた。

「とんだことになつてしまった。これから、どうして帰るのか」
くたくたになつて、一歩も動けなくなつて、はじめて、こう気

づくのは、分別ぶんべつがたりないやりかたである。じぶんたちが、まだ分別のたりない子どもであることを、みんなはしみじみ感じた。とつぜん、「わッ」と、だれかなきだした。森医院の徳一君である。わんぱくものでけんかの強い徳一君が、まっさきになきだしたのだ。すると、そのまねをするように兵太郎君が「わッ」と、同じ調子でなきだした。久助君も、そのなき声を聞いているとなきたくなってきたので、「うふうふン」と、へんななきだしかただったが、はじめた。つづいて加市君が、ひゅつといきをすいこんで、「ふえーん」とうまくなきだした。

みんなは声をそろえてない。するとみんなは、じぶんたちのなき声の大きいのにびっくりして、じぶんたちはとりかえしのつ

かぬことをしてしまったと、あらためて痛切に感じるのであった。そして、四人はしばらくなくていたが、太郎左衛門は、ひろつた貝がらで、足もとの砂の上にすじをひいているばかりで、なきださないのであった。

ないていない人のそばでなっているのは、ぐあいのわるいものである。久助君はなきながら、ちよいちよい太郎左衛門の方を見て、太郎左衛門もいっしょになければよいのにと、思った。こいつはなんとというへんな、わけのわからんやつだろうと、またいつもの感を深くしたのである。

日がまったくぼつして、世界は青くなった。最初に、久助君のなみだがきれたので、なきやんだ。すると、加市君、兵太郎君、

徳一君という、なきだしとはぎやくの順で、せみが鳴きやむようになきやんでいった。

そのとき、太郎左衛門がこういった。

「ぼくの親せきが大野にあるからね、そこへいこう。そして電車で送ってもらおう」

どんな小さな希望にでもすがりつきたいときだったので、みんなはすぐ立ちあがった。しかし、それをいったのが、ほかならぬ太郎左衛門であることを思うと、みんなはまた、力がぬけるのをおぼえたのである。もしこれが、だれかほかのものがいったのなら、どんなにみんなは勇気をふるいおこしたことだろう。

やがて、大野の町にはいったとき、みんなは不安でたまらなく

なつたので、

「ほんとか、太郎左衛門？」

と、なんどもきいた。そのたびに太郎左衛門は、ほんとうだよ、とこたえるのであつたが、いくらそんなこたえを得ても、みんなは信じることはできなかつた。

久助君も、太郎左衛門をもはや信じなかつた。——こいつは、わけのわからぬやつなのだ、みんなとはものの考えかたがまるでちがう、別の人間なのだ、思いながら、みんなにたちまじつている太郎左衛門の横顔を、するどく見ていた。すると、太郎左衛門の顔は、そっくり、きつねのように見えるのであつた。

町の中央あたりまでくると、太郎左衛門は、

「ううんと、ここだったけな」

などとひとりごとしながら、あつちの細道をのぞいたり、こつちの路地ろじにはいつたりした。それを見ると、ほかの四人は、ますますたよりなさを感じはじめた。また、太郎左衛門のうそなのだ。いよいよ絶望なのだ。

しかし、まもなく太郎左衛門は、ひとつの路地からかけだしてくると、

「見つかったから、こいよ、こいよ」
と、みんなを招いたのである。

みんなの顔に、暗くてよくは見えなくつても、さアつと生気の流れたのがわかった。足がぼうのようにつかれていますのも忘れて、

みんなはそつちへ走った。

いちばんあとからついていきながら、久助君は、だが待てよと、心の中でいった。あまり有頂天うちようてんになると、幸福ににげられるという気がしたからであつた。なにしろ、あいては太郎左衛門なのだから、真まにうけることはできないはずだ。

そう考えると、またこんどもうそのように、久助君には思えるのであつた。

そして久助君は、時計をならべた明るい小さい店のところにくるまで、太郎左衛門をうたがっていた。しかし、そこが、ほんとうに太郎左衛門の親せきの家だつた。

太郎左衛門からわけを聞いておどろいたおばさんが、

「まあ、あんたたちは……まあまあ！」

と、あきれてみんなを見わたしたとき、久助君は、救われたと、思った。すると、きゆうに足から力がぬけて、へたへたとしきいの上になすわってしまったのであった。

それから五人は、時計屋のおじさんにつれられて、電車で岩滑やなべまで帰ってきたのであったが、電車の中では、おたがいにからだをすりよせているばかりで、ひとこともものをいわなかった。やすらかさと、つかれが、からだも心も領して、なにも考えなく、なにもいいたくなかったのである。

うそつきの太郎左衛門も、こんどだけはうそをいわなかった、と、久助君は、そこにはいったときはじめて思った。死ぬか生き

るかというどたん場では、あいつもうそをいわなかった。そうしてみれば、太郎左衛門も、けっしてわけのわからぬやつではなかったのである。

人間というものは、ふだんどんなに考えかたがちがっているわけのわからないやつでも、最後のぎりぎりのところでは、だれも同じ考えかたなのだ。つまり、人間はその根もところでは、みんなよくわかりあうのだということが、久助君にはわかったのである。すると久助君は、ひどくやすらかな心持ちになって、耳の底にのこっている波の音を聞きながら、すつとねむってしまった。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：ゆうい

2000年1月27日公開

2006年1月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

嘘

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>